

## 技術評論

(株)宮地鐵工所 代表取締役社長 縣 保佑

行動を起こさなければ失敗は発生しない。然るに、行動を起こすと必ずといっていいほど失敗を伴う。しかし、失敗を恐れてはいけない。昔からの諺に、「失敗は成功の母」という言葉がある。これは今でも生きており、多くの成功は、失敗を礎にして生まれている。この失敗を最小限に止めることが人間の知恵であり、学習効果である。

我々の業務におけるおもな失敗の要因は、モラルの低下に伴い技術力の進歩が停滞すること、情報の伝達がスムーズでないこと、組織間の境界にエアポケットができ、連携に齟齬をきたしていることなどがあげられる。

橋梁製作において、標準マニュアルは品質を均一に保持するために重要なものである。しかるに、マニュアルはいつしか金科玉条のごとく扱われ、改定・改良が難しくなることがある。すなわち、いつしかそれに人間が支配されている。技術は日に日に変化しており、これに対応していくには、マニュアルにも息吹を与えていかなければ、技術は目的と乖離して陳腐化してしまう。このことと同様に、人に対して次のようなことが例えられる。真の成功者は、成功した段階から成功体験を捨て、新たな目標に向かっていく。しかし、成功体験にとどまっている人は、知らない間に壁を作っていくことになり、次のステップになかなか進むことができない。これは、人と橋梁製作技術という違いはあるが、よく似た現象である。

ところで、話を変えてわが橋梁業界の先行きを見てみよう。今まで、建設事業の鋼橋の分野は、長大橋をはじめ、世界全体に匹敵するような仕事が日本一国にあった。これは、いつまでも続く事象ではなかった。これからは、国家財政縮小のなかの適正な配分の下で事業を起こしていくことになる。すなわち、他業種も同様であるが、国民の声を聞きながらプライオリティの高いものから順に事業を進めていくことになる。そこには、従来と同じ企業数で半分くらいの仕事を行っていくことになるので、本当の意味の競争が生まれる。

この競争に打ち勝つためには、次のことが必要となる。すなわち、求められる品質の製品を、求められる価格で提供するということである。生産にこれだけの費用がかかったので、という論理は通りにくくなる。

一方、橋梁事業はすべてが減少傾向にあるわけではない。新しく増加する事業として、アセットマネジメントの分野がある。今後、より厳しくなる財政制約の下で、必要なインフラを安全、品質等という面で確保・維持していくには、新設よりも費用のかからない分野を求めていくのが自然の理である。そこで、我々の鋼橋の分野でも、新設工事に比べて保全事業の比率が大きくなっていく。現状では、スタートを切ってもないせいもあり、発注単価等見直される部分もあると思われるが、この分野での技術、システム等が利益を生み出すところまで育っていない。我々企業がこの分野を利益を生み出す柱のひとつに育てるためには、総合的な技術力が必要とされる。この保全事業は、計画（見積もり含む）→点検調査→設計→製作→現場施工→（再び）点検調査という総合技術である。これには、いろいろな要素技術が含まれている。技術を従来の組織で、設計・製造・架設というように仕切りを作ってしまうと、スムーズな業務の流れは期待できない。今こそ、この流れを妨げる仕切の撤去とともに、ここまでで学んだ中での問題点、課題を整理し、答えの出るものから順にひとつでも解決していかなければならない。このため、当社では平成16年度から保全事業の全社体系的化を図ったところである。関係各位の自覚と理解を期待したい。

これからは、受注量拡大のためいろいろな分野の事業および技術に取り組んでいくことになる。それが、保全事業、海外事業、また新しい技術分野であろうと、そこには新しいことに接する喜び、いろいろな技術を得る喜びがある。長大橋のように華々しい夢ではないが、新しいことを成し遂げることによる自ら掴み取る喜びは、夢の実現と言える。皆の力で夢の実現に向かっていこうではありませんか。